

「ベルリン国際映画祭 若手日本人監督海外プロモーション」

参加レポート

金子由里奈

本事業に参加する前はピッチに対し具体的なイメージも出来ておらず、各国際映画祭でピッチマーケットが行われていることすら知りませんでした。企画立案したものをどう動かせばいいか思案していた中で本事業の情報を見つけ参加を決めました。渡独前に企画のブラッシュアップを行う講義を受けました。アドバイスにより、自分が本当に撮りたいものよりパッケージを優先する場面もしばしばありました。

しかし、実際にピッチを始め何度も自分の言葉で話していると、この企画にとっての自分の重心はどこなのかが明瞭になっていきました。プロデューサーと共にピッチを行う方が建設的だと感じる場面は多々ありましたが、映画に対する理解を深める上でも、多様な文脈を持つ人の言葉にその都度反応しながらピッチをしていくことは、とても刺激的な体験でした。また、私自身の少ない経験でも、日本では”若い女性”とカテゴライズされることが多くあったのですが、今回ジェンダーや年齢で判断されることがなく内容の話からできて嬉しかったです。様々なアイデンティティの差異や交差がある中で、映画業界でのあらゆる差別がなくなることを望みます。

今後の企画進行については、まずパイロット映像を制作する予定です。自分の企画は視覚的なものなので、言葉よりも映像の共有が求められていると感じました。JLOXなどの補助金を使用したいと考えています。また、各映画祭が行っているワークショップもホームページなどでチェックしていきたいです。スクリプトを共有して欲しいと伝えてくださった制作会社もあったので、継続的にコンタクトを取っていきたいです。

海外展開については、ポストプロのみ設備が充実した国で行う方法がいちばん現実的だと思いました。また、日本での資金集めがある程度進んだらコプロデューサーを探すという手段もあるようです。自分が信頼できる作品をセールスしている、海外セールスとの繋がりも重要だと思います。台湾の文化コンテンツの産業化、国際化を促進する組織「TAICCA」も、日本の企画を探していて注目されていました。若手作家に企画開発費の費用を出す取り組みもあります。私自身、本事業参加前はこれらの情報を知らなかったのですが、日本の映画産業がより発展するために情報を共有できるサイトなどが必要だと感じました。海外展開は難しい側面も多くあると思いますが、作品の出口が増える可能性があると思います。

現在もイスラエルによるガザでの非人道的な虐殺が続いており、ドイツ政府の対応を踏まえ、ベルリン国際映画祭でボイコットの動きがありました。そんな中での参加だったので、個人的に大きな葛藤がありました。世界各国に数多の問題があり、それに対する対応は国、その人によって様々です。海外展開していく際にこのような政治的意見のすり合わせは重要な問題です。ピッチの最中にも、停戦を求める缶バッチをつけている方もいました。ピッチマーケットが行われたマルティン・グロピウス・バウの前には、ドイツ、EU、イスラエルの国旗が靡いており、その入り口では、親パレスチナのダイニングがあり停戦を求める声が上がっていました。それぞれの文脈を持った声が入り交じる場所で、映画は作られているということを実感する毎日でした。

